

最優秀賞

神奈川県教育長賞

小さな勇気

平塚市立神明中学校

三年 春 木 日菜子

カツ、カツ、カツ、一定のリズムを刻み、何か地面を叩く音が背後から聞こえた。それは、新横浜駅での出来事だった。駅前には大きな歩道橋があり、私は母と駅に向かって歩いていった。

振り向くと、白杖を手にした男性が、杖を右斜め前から左斜め前へ、また右斜め前へと弧を描くように地面をつきながら歩いてくる。男性の足元には点字ブロックが続いていた。

周りの人は皆、男性に道を譲るようにスッと道を開けた。まるでファスナーを開けるように、男性を中心に静かに人の塊が左右に分かれていった。私と母も同じように黙って道を譲った。が、母は少し考えてから「ママ、あの人のお手伝いしてくるね。」と私に言うと、男性に近づ

き「ご一緒しましょうか？」と、介助を申し出た。男性は「ご親切にありがとうございます。」と言って、母の二の腕のあたりを掴んだ。初対面同士のぎこちない会話を交わしながら、三人並んで歩いた。

ほどなくして駅に着くと、男性は駅員さんのところまで連れて行って欲しいと言った。その先は、駅員さんに介助をお願いするそうだ。こういった公共の交通機関などでは、駅員さんたちが介助してくれるということを初めて知った。

別れ際に男性は「ありがとうございます。」と何度も繰り返し頭を下げ、母にお礼を言った。私は道を尋ねられた時、ためらうことなく誰にでも教えることができる。バスや電車の中で、高齢の方が立っていれば、席を譲ることだってできる。それなのに白杖を手にした方に、自分から声をかけることはできずにいた。まず、なんと声をかければいいのか分からない。仮に声をかけたところで、かえって相手の迷惑になるかもしれないし、それで断られたら恥ずかしいという気持ちがあった。だが、目の前の男性の姿を見て、それはとんでもない勘違いだったのだと気がついた。男性は心から母に感謝していた。

ふと、目が見えない状態で人ごみを歩くと、どんな感じなのだろうという疑問が湧いた。男性と同じように母の腕を掴み、目を閉じて駅の構内を歩いてみた。

人の気配は感じる。でも、それがどのくらい離れたところにいるのか見当もつかない。視覚を失った途端、聴覚が冴え、周りの音や声が普段より大きく聴こえた。音は耳の奥で反響し、緊張と不安で足がすくんだ。

視覚を失った人は、持っている聴覚などを最大限に使い、恐怖心と戦いながら街中を歩いているのだと想像した。そして、これまで声をかけようとしなかったことを深く反省した。

母は、「自分から声をかけるのって、勇気がいるよね。それって、小さな勇気なんだけどね。」と言った。今までの私には、その「小さな勇気」がなかった。しかし、今回のことで気持ちに大きな変化が生まれた。

公共の場で、私たちが何か手助けを必要とするとき、「あの人なら親切そうだから。」など、相手を探すことや選ぶことができる。だが、視覚に障がいを持つ人は、介助を必要としても、それをできる人がどこにいるのかさえ分からないだろう。そうだとしたら、視覚に障がいを持つ人が「そこにいる」ことを見つけることができる自分から、介助を申し出ることが大切なのだと考えるようになった。「小さな勇気」を持つ人になろうと心に誓った。

道を譲るために離れていくことも一つの親切だが、「一緒に」と寄り添ってくれる人がいることの方が、はるかに安心感を得ることができはるはずだ。何しろ、目を閉じて歩いた時、掴んだ母の腕は最強だった。

母の「小さな勇気」が、私に「小さな勇気」を持たせるキッカケとなったのだ。

私も、この作文を通して、また、実際に行動に移すことで、「小さな勇気」を持てずにいる人への後押しができたと思う。

私の「小さな勇気」がもう一つの「小さな勇気」を生み、それがまたどこかでもう一つの「小さな勇気」を生む。そうやって広がっていつて欲しいと思う。